



昭和 2 0 年国鉄八高線多摩川鉄橋列車衝突事故
(1945. 8. 24)

八高線列車事故

終戦間もない昭和二十年八月二十四日午前七時四十分頃、国鉄八高線多摩川鉄橋上で、高崎発八王子行き列車と八王子発高崎行きが正面衝突した。死者百四名、重軽傷者約百五十名、行方不明者二十名以上の大惨事となった。

高崎行き下り列車には、各地から復員して来た多くの兵隊が乗車し、八王子行き上り列車には、東京空襲から逃れて北関東などに疎開していた人や軍需工場の通勤者、女生徒たちが乗っていた。事故の原因は、操作上のミスとされている。事故現場の多摩川には、今でも沈んだ機関車が砂岩の下に埋まっているという。

◇散歩のみどころ

JR八高線小宮駅から谷地川、多摩川べり、そして平町界隈を歩き小宮駅に戻る、凡そ四kmの行程。

駅から直ぐにおぼすな様の日吉神社へ。そこから都道五十九号線をくぐり、笛継観音で知られる東福寺と隣の山王宮へ。少し歩いた先の谷地川から、緩やかな坂を辿りつつ七つ塚古墳跡へ。さらに、おちややの松、日野用水と旧谷地川合流地点、蜷見橋を渡ってお手引き地蔵を参拝する。その後、困民党が一揆を起した多摩川の築地の渡しへと歩く。さらに堤防沿いを上流へ辿り、古代地層の牛の背、そして大列車事故の八高線鉄橋付近、平の渡しへと至る。この付近から町に入り、大イチョウ、平の東照宮、カタクリ寺の大蔵院、西玉神社、歳の峰の遊歩道を歩き、画家・関文川の生家、セイの神を拝した後、小宮駅へと戻る。

●小宮町の由来

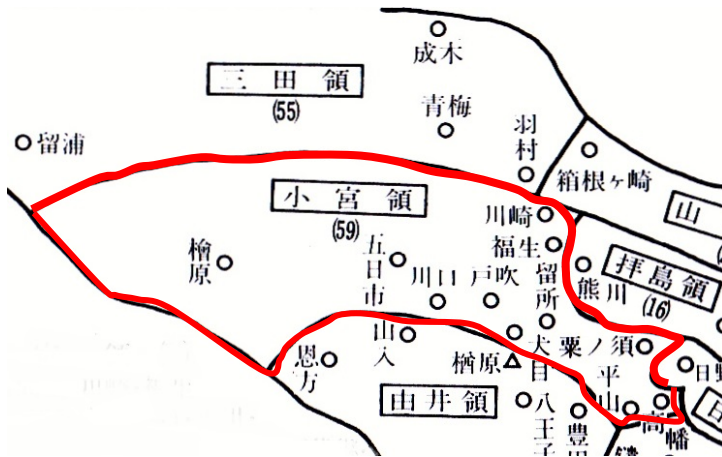
新編武蔵風土記稿によると、「粟之洲村は 郡の東にて 江戸日本橋より行程十一里なり 家数五十一軒 南は石川村にて 西は平村なり 北に大神 築地 宮澤の三村と隣り 多摩川を界とせり 東西二十町ほど 南北十五町ばかり 水田は わずか四分の一として 陸田其三にあたり 原野山林も有り この村小村なれども 戸数多く 耕商の利潤ありて頗る賑わえり 古より御料私領うちまじりて 御料は今小野田三郎右衛門支配せり 私領は安藤次右衛門が知行なれど賜はりし年代をしらず 高札場は小名下河原と小名四ツ谷の二ヶ所村にあり」とある。

谷地川と多摩川の洲であり、日野本郷用水として平村にて多摩川からの引水と村の河原より引水する二条があった。山王宮、東福寺、薬師堂、観音堂が築地の渡しへゆく往還の傍にある。

小宮町の由来は、明治二十二年（一八八九）市町村制が施行され、大和田、北大谷、西中野、粟之須、北平、石川、宇津木の七ヶ村の区域が合併して南多摩郡小宮村となる。村名を「小宮村」に定めたのは、建久三年（一一九二）源頼朝が鎌倉に幕府を開き、その家臣小宮五郎左衛門尉を地頭に任じて戸倉城に居城させ、多摩川南辺五十九ヶ村を所領とした。当地方もその所有地で小宮領としていたため小宮村と定めたといわれている。昭和九年（一九三四）町制施行で「小宮村」が「小宮町」となる。小宮氏は、日奉宗頼の子孫で滝山城や八王子城に小宮曲輪と名が残されている。また大石氏及び北条氏照の家臣との説もある。

昭和十六年（一九四二）小宮町は八王子市と合併した。昭和十八年（一九四三）大字名を廃止し、町名を付した。旧小宮町地域は、大和田町、中野町（旧大字西中野）、大谷町（旧大字北大谷）、宇津木町、石川町、小

宮町（旧粟之須）、高倉町（旧大字粟之須新田、旧大日野の一分）、平町（旧大字北平）になった。



小宮領略図（「桑都日記」・文政5年4月による）

① 八高線と小宮駅

昭和六年（一九三一）、八高南線として八王子～東飯能間が開通。蒸気機関車が走り出し、同時期に小宮駅が開業された。昭和九年（一九三四）八王子～高崎間が開通した。



小宮駅 「小宮町制施行写真帳」 昭和9年

② 粟之洲日吉神社

祭神 大国主命

創建 元禄十六年（一七〇三）

例祭には、「粟之須囃子」を奉納。土地の人たちには、粟之須の「おぼすな様」と呼んでいる。いわゆる土地神様で産土神のことと思われる。新編武蔵風土記稿には、「山王様」と記されている村の鎮守。



さようなら蒸気機関車「八高号」
（小宮駅付近）昭和45年 撮影：山田俊明

③如意山寶珠院東福寺

小宮町一二三二



粟之洲日吉神社社殿

宗派 天台宗
 本尊 阿弥陀如来（座像）
 寺宝 観音堂（十一面観音）秘仏
 開山 中興七世栄源法印
 開創 宝永二年（一七〇五）以前
 厄除けの祈願寺で、境内には、観音堂、薬師堂があつて「観音絵馬」「薬師絵馬」がたくさん納められている。



阿弥陀三尊



東福寺門



笛継観音厨子

●十一面観音（笛継観音）

境内にある観音堂のご本尊十一面観音は、一名「笛継観音」とよばれ、武蔵国一円に悪疫が大流行した時、帝より関東の鎮護のため京都御所に安置されていた十一面観音（笛継観音）を武蔵国につかわされることになった。日夜「天下泰平、聖朝安穩、万民豊楽」の祈念のやむことがなかった。しかし、元龜の兵火のため、諸堂ごとく焼失したが、この笛継観音は難を逃れた。

● 笛の彦兵衛伝説

笛の名手の彦兵衛は、この観音さまのある粟之須地方の守将であつたと伝えられている。

彦兵衛は横笛の名手であり、城主氏照も和楽を好み、秘蔵の名笛「大黒」を彦兵衛に預けておいたが、いかなる手落ちか、これを壊してしまった。

主君秘蔵の名笛であり、天下の二管（「大黒」と「獅子」）の一つであるので「わが一命に代えても」と、この観音に祈念したところ、ある夜不思議な霊夢のお告げがあり、翌朝笛の箱を開いてみると、元の通りになつていたという。このことが、城主氏照に聞こえ、その褒美としてこれより笛の彦兵衛と号した。

その後、天正十八年六月（一五九一）八王子城攻めの折、この笛の彦兵衛も乱戦の中に討死し、名笛も失われたという。（四谷の相即寺過去帳に記載されている）

● 千葉周作の奉納額と絵馬

本堂内には、文政年間（一八一八～三〇）千葉周作に始まる剣術の一派「北辰一刀流」の額が奉納されている。また、「はなはくれないやなぎはみどりぼだいそう」と書かれた絵馬が奉納されている。



北辰一刀流・奉納額

● 子授け石

子授け石は、別名跨ぎ石で、子授けを願う女性が戌の日の戌の刻（午後八時頃）に祈願して跨ぐと立派な子どもを授かるという。



子授け石



絵馬

●お手引き地蔵

京都御所から十一面観音（笛継観音）を鎮護安寧のため、お招きした道案内のお地蔵さまであると云われている。



お手引き地蔵

④山王宮

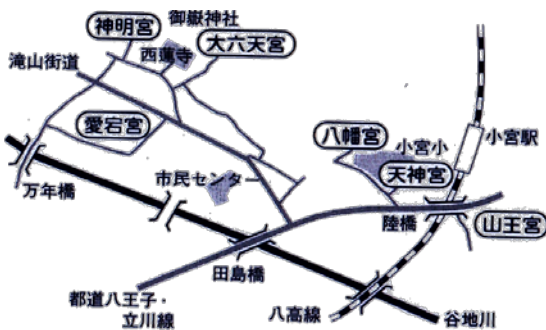
石川町にふるさとの話として伝わる「七苗字七氏子」の一つの宮。

石川町は古くから開けた土地で、七つの氏族が共に栄えていた。平安末期の帝にかかわる由緒ある血筋ともいわれ、また、一説では、甲斐武

田家と同じ、新羅三郎の流れともいわれている。昔から石川の「七苗字七氏子」といわれているが詳しい記録は残されていない。山王宮の建立は文化二年（一八〇五）に石川村が嵐で全滅してしまったため、再び災害に見舞われないように、守護してもらうためと云われている。

石川村に住む七つの姓の家にそれぞれ一つずつの氏神さまがあり、現在も残され祀られている。

- ・和田姓は山王宮
- ・立川姓は天神宮
- ・内田姓は八幡宮
- ・金子姓は大六天宮
- ・沢田姓は神明宮
- ・池田姓は愛宕宮
- ・串田姓は熊野速玉宮



「七苗字七氏子」の地図



山王様

⑤谷地川

加住町の龍源寺にある室町時代の板碑に「谷慈郷」と刻まれており、谷地川は「谷慈郷」を流れる川からつけられたといわれている。その源は戸吹町にあり、滝山街道に沿って南東に流れ、日野市内で多摩川と合流する。一級河川でその延長は一・二・九km、流域面積は一八・二km²と都内では中規模の河川である。旧谷地川は蛇行の激しい川で有名であったが、改修工事により旧河川敷は遊歩道に変わった。



現在の谷内川



旧谷川マップ

ひまつりじようし

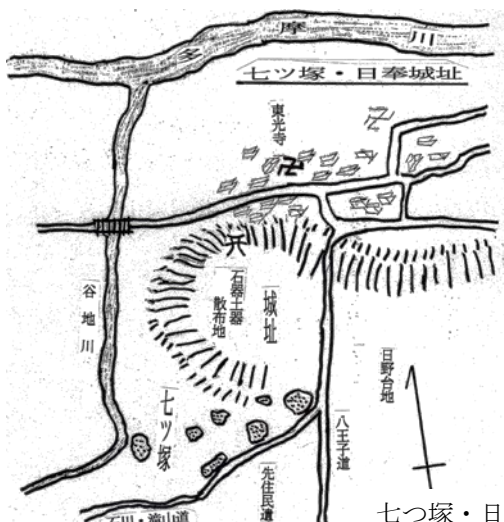
⑥日奉城址と七つ塚

日野市新町五丁目

鎌倉時代に活躍した武蔵七党の一つである西党の平山季重の先祖は、日野市東光寺（現在日野市新町）を本拠地として栄えた日奉氏という豪族の出である。

日奉氏の祖は、日奉宗頼といい、京より武蔵の国の国司として下向し、任期を終わってもそのまま土着したと伝えられている。一説には石川の牧の牧官として土着したという。

日奉城址は、日野台の北縁で七ツ塚古墳付近ではないかといわれている。ここは北を多摩川に、西を谷地川によって区切られる舌状の台地で、南は高倉の野（日野台）が広がり、眺望きわめて優れた地点である。城址の鬼門に建立したのが東光寺の薬師さまである。



七つ塚・日奉城址



日奉氏七つ塚古墳跡

⑦おちややの松

小宮町五一

日野市より八王子市内小宮町、石川町を経てあきる野方面に通ずる国府道（旧甲州路、現在滝山街道とも呼ばれている）と、由木方面に向かう道路との交差点近くに老松が生えていた。この松は、道しるべとしての大切な役目を果たしてきたもので、目通り幹囲三m、枝の張り二〇m、高さ六m、樹齢およそ二百五十年程の松であったという。現在の松は近年植樹されたものである。

この松の名の由来は、茶屋があったからとか、近くで谷地川が多摩川に落ち合うからとか、武田信玄と北条氏照が落ち合った場所という伝説などが残っている。かつてこの松の雪景色は、景勝の一つに数えられていたという。



(昭和40年～45年頃)



(昭和18年頃)

おちややの松



現在のおちゃやの松



おちゃやの松（昭和51年9月）

⑧ 日野本郷用水

小宮町

新編武蔵風土記稿によると、
「日野本郷用水は 農業用水の名
二条の水路があり 一つは平村の多
摩川より取水し 粟之洲をへて日野
に入る 一つは粟之洲村の河原から
取水し同じく日野に引水していた」
と記されている。



日野用水（北平用水）」と谷内川の交差する所

⑨ らんかん橋（蛍見橋）

多摩川から分水して流れる日野用水に架かる「らんかん」つきの橋が、
蛍見橋である。小さな橋で、昔は土
橋であったが、大正の頃に初めてら
んかんのついた橋ができたので、珍
しがって「らんかん橋」と呼ばれて
いた。またその頃、この橋の付近に
は沢山の蛍が飛びかっていたことか
ら蛍見橋とも呼ばれた。以前は石川
や日野の方からも、蛍狩りにやって
くるほど有名だったが、今はめった
に蛍の姿を見ることがないという。



日野用水と旧谷内川が交差
するところ

⑩ 築地（福島）の渡し

ついで

文禄年間（一五九二〜九六）、粟之須と多摩川の川向の福島、築地との間に「築地の渡し場」があった。渡し場には粟之須、福島、築地の人が交代で番をしており、通行人からは一人二銭の通行料を取っていたが、粟之須、福島、築地の人は無料だった。昭和十六年（一九四一）頃まで渡しは使われ、その後、木製の橋を経て、昭和四十五年多摩大橋が開通した。



日野用水の架かる欄干橋（蛍見橋） 昭和初期



築地の渡し跡



旧築地の渡し 昭和21年頃

● 一揆打払い

武蔵之国秩父の里で百姓一揆が蜂起した事件がある。慶応二年（一八六六）のことで、はじめは百姓一揆であつたが、しだいに力を加え二千名を超える一党がのぼつてきた。六月十五日のこと、小宮村粟之須の名主井上忠左衛門は飛脚を日野にとばし、日野農兵隊に助けを求めた。日野隊と秩父党との戦いは、ちょうど築地の渡しで行われた。日野隊の奮闘で、一揆の群れを打ち破ることができた。暴徒と化した二千人の集団の目標は八王子宿にあつたという。八王子を襲つて桑都の財宝をかすめ、さらに横浜を廻つて江戸に侵入する予定だったという。その暴徒の群れを食い止めたのは日野隊の働きであり、その場所が築地の渡しであつた。

⑪ 牛の背

八王子百景にも選ばれている八高線付近の珍しい川の地形である。多摩川の流れがいくつかに分かれ、その間を牛の背のような形の細長い高まりが長く伸びていて、一見すると牛の群れが泳いでいるように見える。多摩川のこの付近でのみ見られる珍しい地形である。また、この付近からは、昭和三十六年にクジラの化石が発見された。「アキシマクジラ」と命名されている。



牛の背

⑫ 三つの列車事故

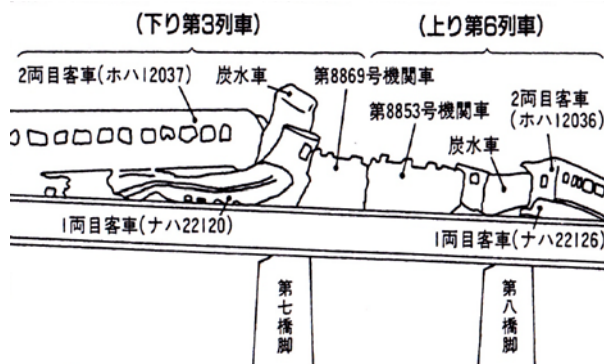
第一の事故は終戦間もない昭和二十年（一九四五）八月二十四日午前七時四十分頃、国鉄八高線多摩川鉄橋上で高崎発八王子行き上り列車と八王子発高崎行き下り列車（双方五車両編成）が正面衝突し、死者百四名、重軽傷者約百五十名、推定二十名が行方不明になる大事故が発生した。当日は、前夜からの豪雨で多摩川は増水していた。乗客は終戦を迎えて故郷に帰る復員兵等が多かった。

第二の事故は、一年半後の昭和二十二年五月、東飯能駅と高麗川駅間の湾曲級坂でスピードを出しすぎ脱線事故を起こした。死者百五十九名、重軽症者約五百名を出した事故であった。

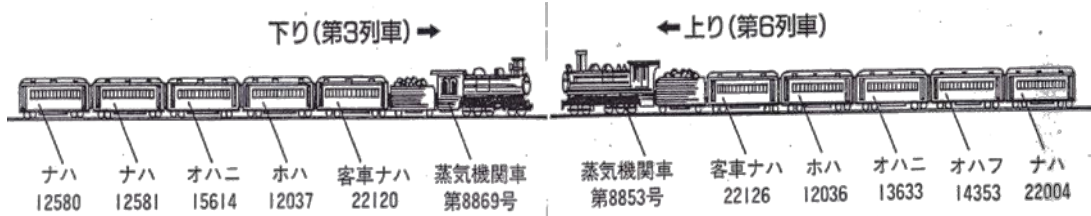
第三の事故は、同年七月、第一の事故の少し小宮駅寄りで発生。米軍の双発軽爆撃機が墜落し、貨物列車に突っ込んだものである。



第一の事故
八高線事故の車両のモニュメント



第一の事故
国鉄八高線多摩川鉄橋列車の正面衝突概要略図

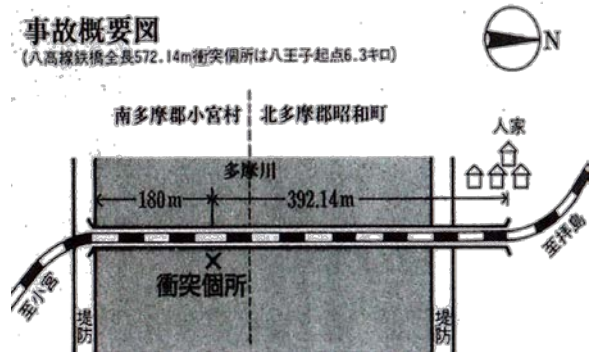


第一の事故の際の車両編成

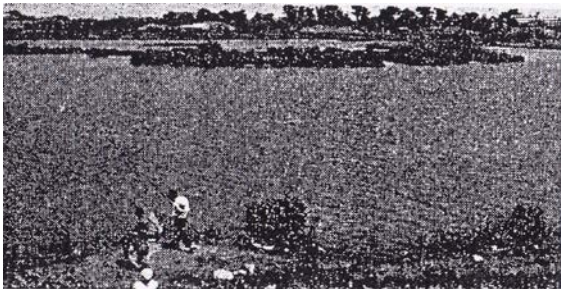
⑬ 平の渡し (大神の渡し)

多摩川にあった渡船場、江戸期に平村と対岸の大神村とを結ぶ渡船があつて川越街道の往来に利用されており、さらに古く後北条氏の時代から用いられていたという。昭和七、八年ごろ廃止となり、旧渡船場の位置には大きな堰が出来ている。

当時、二艘の船が運行しており、



第二の事故
八高線列車脱線転覆事故概要図



平の渡し・昭和45年頃

明治の古老たちは、毎日この渡し舟に乗って昭島市の成隣小学校に通学していたという。大神村と平村の住人は運賃が無料で一般は二銭だった。竿でこぐのは技術が必要のため、昭和になつてから鉄線を引き、それをたぐつて渡れるように改良した。その後、水量の減少で舟は廃止、代わって仮橋が作られたが終戦時になくなり、今は名のみ残っている。

●村の渡し

「熊川の渡し」（福生）、「築地の渡し」（栗之須・築地）、「大神の渡し」（昭島）、「滝の渡し」（八王子）、「日野の渡し」（日野）、「是政の渡し」（府中）など、多摩川にはまだ橋がなかった頃は随所に渡し場があった。

拝島の渡しの船頭だった高橋茂吉さんは「勤務時間なんてなかったし、夜も病人がでると川向に連絡に行く、緊急の人がいれば舟を何時でも出した。また舟は一度に三十人程、馬と馬車を一緒に運んだことも」と話してくれた。

大正末期から昭和初期にかけての「渡し賃」は徒歩の団体一人二銭、個人三銭、自転車五銭、馬力（馬車）二十五銭、人力車は客共々十五銭、軍人軍族憲兵それに村の人々は何回乗っても無料だった。また、こんな規則もあった。渡し場から上流二百十六m、下流約八百mの範囲では、渡し舟に乗らず川の中を歩いて渡っ

ても渡し賃をとられた。ちなみに高橋さんの日当は一日一円五十銭。昭和十年からは大型の船が就航（長さ一四m、幅三・四m）し、定期バスまで乗せていた。渡し賃を客から取るのは請負人の仕事だったが請負人が帰った午後六時ごろから翌朝までの料金は船頭の余得だった。春秋の行楽シーズンには、八王子の滝山城址や高尾山に行く人が埼玉県や群馬県から自転車で押しかけ一日千人は渡したという。（昭和四十七年頃）



多摩湖バス 所沢―八王子を通る定期バスで、拝島の渡しを船で超える。フェリーポートのはしりか…

⑭日野本郷用水 北平取り入れ口

新編武蔵風土記稿によると、「農業用水は二条の水路があり、その一つは平村の多摩川より取水し、栗之洲をへて日野にて水田などに活用された」とある。



日野本郷用水（多摩川取り入れ口）

● 平町

市の北東端。多摩川にのぞむ平地にある。昭和十六年（一九四一）小宮町の八王子市への編入ののち、四十三年同町内の旧大字北平が平町となる。のち七十七年、西寄りの地域を丸山町に分割。八十八年には南の丘陵上の地を久保山町に分けて、町域が狭まった。世定数七十四、人口二百五十七。江戸期の平村、明治十一年（一八七八）からは南多摩郡内の同名村と区別するため北平村と称していた。東端をJR八高線が走る。西寄りに北平用水の取り入れ口があり、東流して小宮町へ入る。多摩川にもと平の渡しがあつた。

⑮ 東照宮の平家

先代は小野大蔵といい、元和時代（一六一五〜二三）に郷土の人となり、平姓を名乗り、名主も努めた。徳川家康公が小田原から川越に行く途中、この平家で休息した。その時のお礼として金銭一枚を扇子ごと頂き、これをご神体として庭に東照宮を建てたと云われている。全国に東照宮は多数あるが、自宅の敷地にあるのはこの平家のみである。当時の彫刻等は今も残されている。千人同心は、日光警備交代の行き帰りに、この東照宮を参拝していたと伝えられている。



東照宮のある平家祠



徳川家康から拝領した葵の紋章入り扇子と洪武通宝（平隆氏 所蔵）



東照本殿

①⑥ 比盧宝寶山福生寺大蔵院

平町二四七

宗派 真言宗智山派

本尊 文殊菩薩

開基 栄秀和上(小野八郎左衛門)

開創 元和七年(一六二一)

いわきの平から来た人が才蔵坊を開く。その後、小野大蔵が討死した後、子の八郎左衛門が開基。

万治三年(一六六〇) 本堂を焼失。

文化七年(一八一〇) 本堂を建立した。



福生寺大蔵院

①⑦ 平町の西玉神社

西玉は、むかし多摩川の近くに氏神さまとして奉られていたが、大正末期に川の増水により、現在の場所に移された。ご神体の御影石(約三十kg)が奉られている。平町では徳川家康と関係が深く、日光に向けて建てられている。



①⑧ 平の大いちよう

むかし徳川家康が多摩川の渡しを通る時に、褒美として小判を与えたことから、土地の人々はこのあたりを、金銭平といっている。ここはむかしからずっと十三軒ほどの戸数のこじんまりとした集落であるが、村のほぼ中央に樹齢およそ五百年といわれる大いちようがある。目どおり幹囲六m、高さ十mほどで、仙人が道を教えてくれたという昔話が残



西玉神社

されている。夏の始めから、秋の紅葉の時期には、豊かな葉の美しさが見られる。



大いちょう

⑱歳の峰峠（遊歩道）

宇津木村へ抜ける峰で、今はなくなってしまうが、歳の神が祀ってあった。歳の神は、「障」の神であり、さわりごと、たたりことから守るために、村の境目に祀られている。

平村の吉郎兵衛が小田原へ行った帰り、化け物の妖女にとりつかれたが、この歳の峰峠でさらりと厄が払われた。今では、四季を問わずハイキングコースとなっている。

●平の稻荷の松

カタクリで有名な平町の大蔵院辺りから、小宮町方面へ細い道がぬけている。水再生センターの一番西側に当たる。以前はその道の途中左手に塚があり、大きく枝を張った松の太木があった。地元の人たちは、「稻荷の松」と呼び親しんでいた。松の根元に田守稻荷が祀られていたからだという。

昔、度重なる多摩川の氾濫で、この辺り一帯が何時も水害に見舞われ



歳の峰峠を歩くハイカー

水田が砂利に埋ったという。農民は水害に二度と遭わぬよう砂利で塚を築き、そこに松を植え稻荷を奉り神の力を借りるべく願ったという。

平町や小宮町の多摩川沿いには、何箇所か塚を築き松を植えた場所がある。おそらくは「おちやの松」も、同様だったのではないかと考えられる。農業神であるお田守様の松の下で豊作を祝う祭の宴など、今は何一つ残っていない。



平の稻荷の松【一本松】

②0 絵師関文川と生家

小宮町

寛政二年（一七九〇）粟之須村の名主の家に生まれる。本名関根政五郎光信。若くして画才に秀れ、歌道、俳諧に通じ、谷文晁の弟子ともいわれている。関西地方や九州長崎など遊歴し、絵師や文人と交流したという。嘉永三年（一八五〇）薩摩藩島津公の依頼で画いた大内図巻ほか数点を残している。嘉永二年（一八四九）「富嶽奇観」「文川画譜」「画式指掌」を出版。文久二年（一八六二）の手紙等が残っている。文川がいつ亡くなったかは不明である。



絹本着色大内図巻

嘉永元年（1848）の孝明天皇元服式の内裏の様子や調度品を書いたもの。（関根康博氏所蔵）

市指定有形文化財（絵画） 昭和 36. 6. 1 指定

②1 セイの神

小宮町

セイの神は塞の神、境の神と書き、詠み方もサイノカミ、セエノカミ等ある。

人が集落を成して社会生活を営みだした頃から、生活の安全を守るため、また、村に邪霊邪鬼の類が入らない様に遮り、撥ねかえすために境に道祖神、しめ縄などの結界がおかれた。その場所では、小正月にどんど焼が行われていた。



セイの神

◎参考資料

- ・新編武蔵風土記稿
- ・八王子市史、日野市史、昭島市史、あきる野市史
- ・笛継観音の東福寺・大蔵院資料
- ・石川市民センター広報、記念史
- ・多摩考古（日野の考古学を拓いた立川多蔵）
- ・民俗探訪 桑都民俗の会
- ・大列車衝突の夏 船越健之輔著
- ・アキシマクジラ 昭島教育委員会
- ・八王子郷土資料館資料
- ・とんとんむかし 菊地正著
- ・八王子と鉄道
- ・八王子周辺の名主たち
- ・インターネット各ページ
- ・昭文社
- ・八王子市地図
- ・八王子市観光マップ

メモー